

2021 年度

新収蔵作品展

Present for you

わたしからあなたへ
みんなから未来へ

2021.12.18- 2022.2.20

町田市立国際版画美術館 企画展示室 2



はじめに

1987年4月の開館以来、町田市立国際版画美術館は版画を中心とするユニークな美術館として、国内外のすぐれた版画作品と資料を収集・保存し、版画をテーマとする展覧会を開催してきました。また、初心者から経験者まで幅広い層を対象とした実技講座や、各種の版画制作用具を備えた工房とアトリエを制作の場として一般に開放するなど普及活動も展開し、「見る楽しみ」と「作る楽しみ」を総合的に紹介してまいりました。当館は今後も、古今東西の版画の歴史が多面的・総合的に理解できる質の高いコレクションの形成を目指して、継続して収集活動につとめていきたいと考えています。

本展では2020年度から2021年度上半期にかけて新たに当館に収蔵された作品1,206点から、主な作品約50点をご紹介します。今回の新収蔵作品のうち1,061点をしめる町田市立博物館からの移管作品につきましては、2022年3月より開催の「江戸の滑稽」展でも主要な作品を展示する予定です。

最後になりましたが、貴重な作品や資料をご寄贈くださいました皆様、収集活動にご協力くださいました皆様に厚く御礼申し上げます。

2021年12月 町田市立国際版画美術館

1

養蚕機織図屏風 六曲一双

江戸時代初期 各 1,466×3,126mm 紙本着色

「養蚕機織図屏風」は、養蚕から機織りまでの工程を描いた屏風。日本では室町時代以降、中国からもたらされた梁楷筆「耕織図巻」を手本に狩野派の絵師によって描かれるようになったとされます。

出品作品は江戸時代初期の作例と考えられています。右隻には、蚕を育て、繭をつくるまでの工程が、左隻には、繭を集荷し、糸を取り、機織りをする工程が描かれています。空間全体には金泥が掃かれ、開放感と奥行きが演出されています。

2

たはらかさね耕作絵巻 二巻

江戸時代初期 上巻 322×10,086mm 下巻 322×11,550mm

紙本着色

本作は、将軍や大名の子女に農業の苦難を説き民への思い

やりを教える目的で制作された「鑑戒画」と考えられます。

上巻は、土牛の祭りにはじまり、麦作の工程(灌漑、耕作、麦刈り、麦の脱穀・調製など)、養蚕・機織りが描かれています。下巻では稲作が取り上げられ、灌漑から雨乞い踊り、収穫高の検査、稲扱き、俵詰め、俵の検納、そして蔵入れまでが描かれています。日本ではさまざまな「四季耕作図」が発展しましたが、「たはらかさね耕作絵巻」の特徴は、絵と詞書の両方で構成されているところで、ここには中国の耕織図の伝統が継承されています。また稲作だけでなく麦作にも取材し、実際に行われていた二毛作の様子を丁寧に描いているのも特徴です。

3

康熙帝御製耕織図 二冊

清時代 耕 274×258mm、織 274×259mm 木版、手彩色

17世紀末に康熙帝の依頼により、清朝の宮廷画家・焦秉貞が制作した耕織図の版本です。原画は現在は残っていませんが、優れた作品であったため、ただちに木版で刊行され、さまざまな形で普及しました。

出品作品は、乾隆帝以降に刊行された民間本に、後世の人が着彩したものと考えられます。「耕」と「織」の2冊に分かれており、「耕」では主に男性の労働者が稲作に従事する様子が、「織」は主に女性たちが養蚕から機織りに勤しむ様子が描かれています。日本においても模刻が流布し、数々の四季耕作図に影響を与えました。

1~3 町田市立博物館より移管

4

川瀬巴水 (1883-1957)

KAWASE Hasui

五月雨 (荒川)

昭和7年(1932) 363×238mm 木版

久野明子氏より寄贈

川瀬巴水は大正期から昭和期にかけて活動した「新版画」の版画家です。新版画とは浮世絵商で海外輸出用の伝統木版の版元でもあった渡邊庄三郎が大正初期に始めた、浮世絵版画を継承しつつも新しい時代の芸術作品としての木版の普及を目指して制作出版された近代版画の一種です。巴水は1918年(大正7年)より新版画の制作を開始し、生涯に600点を超える版画を制作しました。創作テーマは風景で、日本全国を旅行して目にとまった風景をスケッチし、東京に戻っては版画を制作するという活動を通じて、版画史や風景表現の歴史に功績を残しました。出品作品は新版画の版元であった土井版画店から出版された、五月雨の降る水辺の風景を描いたものです。

5~9

川上澄生 (1895-1972)

KAWAKAMI Sumio

川上澄生は大正から昭和にかけて活動した創作版画の版画家です。創作版画は、複製的版画を批判して明治期末に登場した、自画・自刻・自摺を基本として制作された近代日本版画です。澄生が創作版画の制作を開始したのは1910年代で、1920年代にはさまざまな版画誌(創作版画が入った冊子)や版画展で作品を発表しています。その作品の多くは、文明開化期の風俗や文化を取り入れた、素朴ながら洒落な調子であるのが特徴です。

《絵ノ上ノ静物》には多数の帆を広げた船や明治初期来日者の異国人などが、《洋燈とアルファベット読本》にはランプとアルファベットが印刷された本が描かれ、文明開化の時代を偲ばせる作品となっています。

澄生は子どもでも親しめる自作の詩と版画の入った挿絵本を多く出版しています。その多くは詩も絵も自分で彫り、摺って作った私家本で、手作りの味わいがあり、愛書趣味に応えるものでした。出品作からも本への思い入れが伝わります。『ゑげれすいろは』はAからZのアルファベットの頭文字で始まる単語に寄せた詩の冊子と、版画による挿絵をまとめた2分冊の詩画集です。『横濱どんたく』は多色摺りの木版と詩を組み合わせた絵本です。出品の絵はがきは1月から12月までの景物を木版画で表した作品です。長崎・出島の正月や踏絵などのほか、明治期の街や季節の植物など、澄生らしい絵が描かれています。

5
絵ノ上ノ静物
昭和元年(1926) 220×309mm 木版

6
洋燈とアルファベット読本
昭和元年(1926) 208×308mm 木版

7
『ゑげれすいろは』
昭和5年(1930) やぼんな書房刊
176×118mm (表紙) 木版、冊子

8
『横濱どんたく』
昭和22年(1947) 日本愛書会刊
130×183mm (表紙) 木版、冊子

9
『版画絵葉書』全12点
制作年不詳 昭和時代前期 90×140mm 木版

- 9-1 出嶋蘭館と蘭陀正月 (第1回)
- 9-2 躑躅銅板 (第2回)
- 9-3 雛絵 (第3回)
- 9-4 桜花の景 (第4回)
- 9-5 朴の花 (第5回)
- 9-6 柘榴の花とおもちゃ (第6回)
- 9-7 日光龍頭の瀧 (第7回)
- 9-8 夏日景物 (第8回)
- 9-9 秋の野の草 (第9回)
- 9-10 サイロのある秋の北海道 (第10回)

- 9-11 洋燈と女 (第11回)
- 9-12 カケス (第12回)

10
前川千帆 (1888-1960)
MAEKAWA Senpan
『ゴールデンバット動物園』
昭和19年(1944) 126×88mm (表紙) 木版、冊子

前川千帆は明治末期から昭和期にかけて活動した創作版画の版画家、漫画家、挿絵作家です。創作版画の制作を始めたのは大正中期で、躍動感のあるユーモラスな造形の版画を展覧会や冊子に発表し続けました。

No.10は千帆が愛飲した煙草、ゴールデンバットの空箱をはさみで切って組み立てたねずみやあひる、たぬきや鶏など、愛らしい動物や鳥などの絵と小文を組み合わせた木版画の絵本です。

《梅林と卓》は、亡くなる年の作品で、戦後の千帆特有の木版と紙版を併用した大判の版画です。軽快な味を活かしつつ、のどかで屈託のない千帆らしい作品となっています。

11
畦地梅太郎 (1902-1999)
AZECHI Umetaro
『山上の楽園』
昭和25年(1950) 山と溪谷社刊
208×152mm (表紙) 木版、冊子

畦地梅太郎は大正末から平成にかけて活動した創作版画の版画家です。1970年代に町田市鶴川に移り住んで制作を続け、町田市名誉市民ともなっています。山を歩き、その時の体験を独自の造形で版画に表すという創作活動を続けたので、「山の版画家」として知られています。

『山上の楽園』は、『山上の開墾小舎』や『高原えの道』など、単純化した素朴な造形で山の風景を表現した畦地の木版画が8点と、昭和期の登山家で山岳雑誌の編集者でもあった川崎隆章の詩歌によってつくられている、初版150部の手作りの挿絵本です。畦地独特の「山男」の絵が登場する直前の、山の風景画を収めた本です。

12
前川千帆 (1888-1960)
MAEKAWA Senpan
梅林と卓
昭和35年(1960) 390×438mm 木版、紙版

5~12 佐藤保正氏より寄贈

13~14

馬淵聖 (1920-1994)

MABUCHI Tōru

馬淵聖は東京出身の版画家。木口木版画家だった父・録太郎の影響で、早くから版画に親しみました。1937年、東京美術学校工芸科図案部に入学し、平塚運一の指導を受けました。1960年には棟方志功や前川千帆らとともに日本版画会(日版会)を創設、1981年に会長に就任し74歳で亡くなるまで同職を務めました。

馬淵は生涯を通じ、出品作品のような卓上の静物をテーマとした作品を多く残しています。彼の作品で目をひくのが「モザイク効果」。版木に細かく切った薄い板を不規則に隙間なく並べて貼り付けていく馬淵特有の装飾的表現です。

13

一輪ざし

昭和46年(1971) 428×278mm 木版(多色)

14

ひなげし

昭和53年(1978) 424×275mm 木版(多色)

13~14 岩切裕子氏より寄贈

15~23

荒木珠奈 (1970年生まれ)

ARAKI Tamana

荒木珠奈は東京都出身のアーティスト。武蔵野美術大学短期大学美術科専攻科を卒業後、メキシコ国立自治大学に留学。1997年に武蔵野美術大学造形学部油絵学科版画コースを卒業。現在はニューヨークを活動の拠点にしています。出品作品は「インプリントまちだ展2018」に招聘され町田に取材して制作した作品です。かつて町田で盛んに行われていた養蚕の記憶を探るなかで、自らも蚕を飼育し、繭をテーマに新作を発表しました。出品作品はいずれも、蚕を飼育した体験からインスピレーションを得て制作されたものです。NO.21~23はニードルで8の字を描き続けた銅板を異なる色で2回刷った作品です。8の字を描くのは、蚕が繭を作る動きに由来します。

15

繭の中で

平成30年(2018) 100×97mm エッチング、雁皮刷り

16

三

平成30年(2018) 98×112mm エッチング、雁皮刷り

17

繭

平成30年(2018) 98×98mm ドライポイント、雁皮刷り

18

眠る光

平成30年(2018) 176×187mm エッチング、雁皮刷り

19

たままゆ・k

平成30年(2018) 150×220mm エッチング、雁皮刷り

20

たままゆ・p

平成30年(2018) 150×220mm エッチング、雁皮刷り

21

cocoon・赤

平成30年(2018) 275×195mm エッチング

22

cocoon・白

平成30年(2018) 275×195mm エッチング、雁皮刷り

23

spiral・O

平成30年(2018) 266×450mm エッチング、雁皮刷り

15~23 作家より寄贈

24

横尾忠則 (1936年生まれ)

YOKOO Tadanori

ターザンがやってくる(緑)

昭和49年(1974) 1024×725mm

作家より寄贈

兵庫県出身の横尾忠則は、神戸新聞等に勤務した後に独立。グラフィックデザイナーとして活躍後、1980年代初めの「画家宣言」後はアーティストとして絵画、立体、小説と多方面に活動してきました。1968年の第6回東京国際版画ビエンナーレのポスターをきっかけに版画に取り組み、自作のポスターや絵画イメージの引用・反復を展開するメディアとして継続的に制作しています。

出品作品はスイスのグラフィック誌『GRAPHIS』の表紙デザインとして作成したもの。映画に登場するターザンは幼少期の横尾にとって超越した肉体を持ち自然と調和した神のような存在だったといい、繰り返し描く重要なテーマです。

25

アグン・プラボウォ (1985年生まれ)

Agung Prabowo

解く 3 / Unravel 3

平成30年(2018) 580×400mm リノカット

美術館連絡協議会より寄贈

アグン・プラボウォはインドネシア・バンドン出身のアーティスト。2010年、バンドン工科大学芸術デザイン学部芸術学科版画コース卒業後、インドネシア、フィリピン、フランス、シンガポールで個展を開き、リノカット彫り進み技法を駆使して作り上げるポップで奇想天外な世界に定評があります。当館では2020年に「インプリントまちだ展 2020」で招聘し、2019年に町田を訪問し、展覧会では代表作と町田に取材した新作を紹介しました。

アグンにとって環境問題は自身の重要なテーマであり、出品作品は手製の再生紙に刷られています。

26~28

白木ゆり (1966年生まれ)

SHIRAKI Yuri

白木ゆりは東京都生まれ、1989年女子美術大学芸術学部洋画(油絵)卒業。現在は白木ゆり銅版画工房を主宰しています。

1980年代から目に見えないものをテーマに制作をしており、1990年代からは「音」に関心を深めていきます。出品作品の「sonic」シリーズもこの時期の白木の代表作のひとつです。版面に傷をつけるような細かい線の集積は、作家にとっての「音の痕跡」を目に見えるかたちにした表現だといえます。近年は音だけでなく、香りなどほかの五感をテーマにした作品も発表しています。

26 Sonic (A)

27 Sonic (B)

28 Sonic (C)

3点ともに 平成10年(1998) 850×1210mm

エッチング、ドライポイント

29~31

村上早 (1992年生まれ)

MURAKAMI Saki

村上早は群馬県生まれ。2016年武蔵野美術大学大学院造形研究課程美術専攻版画コース修了。在学中に数々の受賞をした注目の若手アーティストで、精力的な制作を続けています。

村上早は版に傷をつける行為に心の傷を重ね、自身の体験から着想を得て生と死、痛みやトラウマをモチーフに制作してきました。出品作品のうち《かくす》は初めて色刷りを用いた作品です。羽を奪われた鳥が、事件現場かのようにブルーシートで覆い隠されています。《ふうせん 2》は風船を「呼吸する生物」に見立て、傷つかないように外界から遮断される様子を描いています。

29

かくす / Cover

平成28年(2016) 1180×1500mm

リフトグランドエッチング、エッチング、
アクアチント、スピットバイト (色版)

30

円卓 / Round Table

平成29年(2017) 1180×1500mm

リフトグランドエッチング、スピットバイト、アクアチント

31

ふうせん 2 / Balloon 2

平成30年(2018) 1180×1500mm

リフトグランドエッチング、アクアチント、スピット
バイト (色版)

26~31 長谷見雄二氏より寄贈

32

フランチェスコ・バルトロツィ 版刻 (1727-1815)

Francesco BARTOLOZZI

レディ・スミスと子どもたち

Lady Smith and Her Children

1789 372×297mm

ステイプル法、エッチング、プペ法、手彩色

高橋禮子氏より寄贈

フランチェスコ・バルトロツィはイタリア出身の版画家。既存の絵画の複製を専らとする版画家として主にイギリスで活動しました。細かい点刻でグラデーションを表す銅版画技法「ステイプル法」を用いた作品を多く残しています。

寄贈作品は、ロンドンのロイヤル・アカデミー初代院長のジョシュア・レノルズの油彩画の複製版画。原画はニューヨークのメトロポリタン美術館に所蔵されています。

出品作品の注目すべき点は色の印刷方法です。一枚の版に色の異なるインクを詰め分けて一度に刷る「プペ法」という珍しい技法が用いられています。

33

木口木版画資料

昭和時代 版木ほか

高野日出見氏より寄贈

木口木版は、堅く締まった材質の木を用い、輪切りにした面である「木口」を彫っていく木版画の技法。ピュランと呼ばれる刃先の鋭い版画専用の彫刻刀を用いることで、細かい線を彫ることができます。18世紀のヨーロッパで生まれ、明治時代に日本にもたらされた木口木版は、西洋木版とも呼ばれていました。新聞や雑誌の挿絵などに用いられていましたが、他の印刷技術の進歩にともない、商業美術の分野では姿を消していきます。

寄贈資料は腕時計の広告宣伝用に制作された木口木版の版木や版下原稿など。デザインの教鞭をとっていた寄贈者が教材として利用していました。

町田市立国際版画美術館 2021年12月18日発行

3,000部作成、1部あたりの単価15円(職員人件費を含みます)